

## シネマ探訪

### 映画『日本で一番悪い奴ら』の思い出

田中 忍 三重映画フェス会長

「本年の日本映画ベスト3にランキングする」と、私が会う人々に触れ回っている『日本で一番悪い奴ら』は、北海道が舞台であるが、大部分が三重県桑名市と四日市市で撮影された。去る6月17日、109シネマズ四日市市で開かれた三重県試写会に、撮影時に世話になったと謝辞を述べるため、本作を監督した白石和彌氏がわざわざ来館し舞台挨拶をされた。その際、三重県で撮影した理由を「北海道のすすきの街が整理されていて、時代設定となる1970年後半の雰囲気がなく撮影できない。製作会社が『三重県のこの地は、新しい街と古い街が混在しているし、撮影に対し協力的』という意見もあって撮影を決めた」と白石監督は語った。これを聞いたとき、私が青春を謳歌した昭和という時代は、過ぎ去った遠い昔として思わねばならないのだという寂しさと、三重県にはまだ昭和をイメージさせる街があり、今後、昭和を描く映画やドラマのロケ地として、三重県が改めて注目さ

れて欲しいと期待に胸を膨らませた。

本作には、当委員会はエキストラ集めで関わり、エンドタイトルに当委員会名もクレジットしていただいた。

本作の製作プロダクションは、ジャンゴフィルム。同社とは、2013年、津市美杉町で撮影された『WOOD JOB！〜神去なあなあ日常』（矢口史靖監督）で、製作側のお手伝いをしたことがきっかけで、時々、連絡を取り合っており、本作では「エキストラ集めで、協力してもらえないか？」という電話が入った。エキストラの条件は、主人公が大学時代に柔道をやっているシーンを撮影したく、柔道が出来る大学生を20名以上、さらに、その人たちを警察学校の入校式シーンでも出演したいとの事だった。柔道に縁のない私は、まず、警察OBで柔道経験者である知人に相談し、芋づる式に辿りついたのが、伊勢市にある皇學館大学柔道部だった。ホームページやフェイスブックを見ても実力のある柔道部で、「ここにお願ひするしかない」と同大学の知人に柔道部長を紹介してもらった。体格の良い非常に清々しい青年で、エキストラの話をする、「協力しましょう」と即答してもらい、おまけに「伊勢市から撮影地の四日市市までは（この間100km!）、大学のバスを借り部員を乗せ私が運転し

ていきましよう」という協力も得られた。何とありがたいことだ、飛びあがる嬉しさであった。

撮影日半月程前、エキストラ経験のない学生たちに、撮影時の心得を伝えるとともに、頭髪を短くしてもらう話をした。当初から、頭髪は坊主か短髪という条件でお願いしていたが、「どれくらい短くしたらいいでしょう」という学生からの質問に対する回答を、用意する必要があった。三重県警察はじめ美容院等に取材し、昭和の時代の写真や映像を集めたが、なかなかいいものがなく、結局、私自身がその時代の短髪にして、学生に見てもらった。

「この映画の時代設定は、1977年頃です。働いている男性の頭髪は、今のようにおしゃれなスタイルでなく、『7・3』にするなど堅いイメージのものが多かったです。『2ブロックのカット』や『もみ上げ』もNGです。私のこの髪より長い人は散髪してください。髭も綺麗に剃ってください。」と説明して、私の顔写真も学生たちに送った。

撮影日、学生たちの頭髪は、スッキリとしていて大変気持ちのよいものだった。本作ではタイトルが出る前の短いシーンに学生たちが出演しているが、本作の中で唯一爽やかな部分として印象深く、学生たちも役にピッタリで「うまく行っ

た！」と膝を叩いた。

三重県試写会の日、柔道部部長が仕事のために試写会に参加ができなくなり、代理として参加することになった柔道部の学生と待ち合わせをし、劇場に入ろうとしていた。待ち合わせた時間の2分前に、私の携帯電話が鳴り、「〇〇です。本日お世話になります。今、映画館に着きました」という連絡が入り、その電話の声の所に行くと、スーツ・ネクタイを着用しビジネスカバンを持った青年が立っていた。「君は、撮影の時・・・」と話そうとすると、「はい、撮影の際はお世話になりました」ときびきびした行動とあどけない笑顔がうかがえ、ようやく柔道着で練習をしていた1年前の彼の姿と重なった。柔道部員として大学外へ出かけるときは、身なりをちゃんとしていくことと部長に教わっているとの事。話しっぷりも社会人そのもので、部長と話をしているように思えた。部長が学生に教えている精神なるものが、ちゃんと実践されていると感じられ、映画のみならず、私の生涯で思い出深い一頁が増えた。

## 映画館で上映するMETライブビューイング

吉水 英人 四日市文化会館副館長

仕事柄、映画を始めさまざまな文化・芸術関係作品に触れるようにしている。演奏会や演劇などの舞台作品は、もちろん生に勝るものはないが、映画のように手軽に安価で楽しむことができず、それを少しでも解決できるのがコンサートや演劇が行われている会場の中継映像を映写・音響設備の整った映画館などで上映する【ライブビューイング】だ。

今年11月5日・6日に四日市市文化会館第1ホールで公演する「第10回四日市市民オペラ」の作品が『蝶々夫人』に決定した。しかし、不勉強のためとチケット料金が高額なため『蝶々夫人』を観たことがなかった。そんな折、5月に名古屋駅前にあるミッドランドスクエアシネマでメトロポリタン歌劇場(MET)ライブビューイング『蝶々夫人』が一週間限定で上映されたので出かけた。一日1回の上映であるためか、平日にもかかわらず200席の会場は満席。その魅力は、ニューヨークでの上演からわずか数週間後に日本語字幕付きで5.1chサラウンドの音響と、10台以上のHDカメラを駆使したダイナミックなライブ撮影で、オペラの魅力

が余すところ表現されている。また、生のオペラ公演では見られない幕間に行われる歌手やスタッフへの舞台裏でのライブ・インタビューや、大規模なステージ転換が舞台に懸ける情熱や興奮がさらなる感動を呼ぶ。

さて、オペラ『蝶々夫人』は、19世紀末の長崎を舞台にアメリカ海軍士官と恋に落ちた芸者蝶々さんのひたむきな愛をイタリアの作曲家ジャコモ・プッチーニが作曲。オペラの中には、随所に日本になじみのある旋律やオペラファン以外にも聴き馴染みのある「ある晴れた日に」や「花の二重唱」などプッチーニならではの甘い名曲が悲劇を彩る。今回のメトロポリタン劇場公演の演出を担当したのは、映画『イングリッシュ・ペイシエント』でアカデミー監督賞を受賞したアンソニー・ミンゲラ。100年以上前の日本を外国人演出家がどのように描くか注意深く鑑賞。なかでも大変びっくりしたのは、2幕目に登場する蝶々さんの子ども役が人間ではなく人形で、文楽のように3人の黒衣の裏方がそれを動かして表現している。その遣い方は文楽とは少し違いかもしれないが、確実に歌舞伎や文楽の要素が取り入れられていた。高価なチケット料金を払い良席で観ることができれば人形の繊細な動きもわかるが、2階席や3階席ではわからない表情など

もカメラが寄ってくれるから確認できる。

宮藤官九郎の最新映画『TOO YOUNG TOO DI

E！若くして死ぬ』が「まるで舞台を観ているような感覚」の作品に仕上がっているようだ。映画監督と舞台演出家の垣根が無くなり今後も映画館で、気軽に芝居やオペラ・歌舞伎など舞台作品が数多く観られることを期待したいと思う。

## 午前十時の映画祭

村上 暁 さとる  
団体職員

僕は、あまり映画館に行かなかった。レンタルのビデオやDVDで映画を見ることはあったけど、映画館で映画を見るのは、年に2〜3回程度だった。

2011年2月、109シネマズ四日市で「午前十時の映画祭 何度見てもすごい50本」が始まった。チラシには、一年間で上映される映画50本が紹介されている。

家のテレビで見たことがある映画、見たいと思いつながらまだ見ていない映画など、すごく魅力的なラインナップ。しかも鑑賞料金は1000円、安い。これは全部見なければ。

一日1回、午前中の上映。一作品は1週間で終わってし

まうので、毎週週末は109四日市で映画鑑賞。

シネマポイント（一回鑑賞すると1ポイントもらえて、6ポイントで一般映画が無料）がすぐにたまる。上映前の予告編で見たい映画が見つかる、別の日にポイントを使って鑑賞。こうして、週末だけでなく仕事帰りにも映画館へ行くようになった。

2011年の「シリーズ1赤の50本」、2012年の「シリーズ2青の50本」、すべて鑑賞。この2年間で、映画館で映画を見るという習慣がすっかり身についた。

感動した作品を書き始めるときりがない。『ベン・ハー』を見終わったとき、感動と衝撃で他のお客さんがすべていなくなるまで立ち上がれなかった。『昼下がりの情事』は、最後のシーンで、自分がオードリー・ヘプバーンになったように涙が止まらなかった。

チラシに書いてあった、「映画はただ見るだけではだめ。映画館の大スクリーンで、浸って観るのが醍醐味。」という言葉。身をもって体験した。

今年も、「午前十時の映画祭7」が開催されている。109シネマズ四日市さん、末永く続けてください。

## ジャッキー・チェン自伝「永遠の少年」を読んで

水野圭次郎 四日市☆映画祭スタッフ

私の中学生時代のヒーローといえばジャッキー・チェンで、彼の映画がテレビで放映されると、次の日には友人と酔拳や蛇拳の真似をして、植木鉢を割って怒られたりしました。

本書の巻末でオリピックの元体操金メダリストの李寧は、ジャッキーを評してこう言っています。「ブルース・リーのお陰で、世界はカンフーを知った。ジャッキー・チェンのお陰で、世界はカンフーを通して中国人を知った。」正にその通りだと思います。

今年1月に日本で発売されたばかりの自伝の中から、かいつまんで興味深いストーリーを紹介します。

香港のフランス領事館の住み込みで働く父と母のもとにジャッキーは生まれ、やんちゃでじつとしていられない多動症のため、なんと小学校一年で中退してしまいます。そして、七歳から十年間に亘り中国戯劇学院で京劇と武術を叩き込まれます。そこで盟友となるサモハンキンポーやユンピョウらと出会います。学院では体術ばかりで勉強をする暇がなかったため、字が読めず、唯一覚えたのは自分のサインだけだったそうです。サイン会でファンから色紙に私の名前を入れてくれとか、一言何か書いてくれと言われるのが怖くて逃げだしたくなかったそうです。

す。驚くべきことに映画撮影の際は台本が読めない彼のそばでマネージャーが台詞を読み上げてそれを覚えていたそうです。

アメリカに渡った際もクレジットカードを使用すると、サイン以外にも色々なことを書かなければならないために一切使わず、多額の現金をいつも持ち歩いていたそうです。その後、文盲を克服し、数か国語を操るまでになりましたが、自分の無学さを恥じ、教育の大切さを痛感し、世界中の恵まれない子供たちに教育の機会を与えようと慈善活動をしています。

中国の映画監督 馮小剛からは「大哥(アニキ)あなたがちゃんと勉強していたら、今日の「成龍」はないかもしれませんよ。ちゃんと勉強しなかったことを感謝したほうがいいですよ」とも言われたそうです。確かに全てを目で見て、耳で聞いて、体で覚え、表現することですばらしいアクション映画が出来上がっていったのかもしれませんが。

ハリウッド進出のため若き日のジャッキーがロサンゼルスに滞在していた時の事です。偶然、何度もテレサ・テンと顔を合わせ、親しくなった二人は恋に落ちます。母国に戻れば大スターの二人は誰にも知られていない異国の地で、心のままに恋を楽しんだようです。互いに魅かれ合いながらも帰国すると自由に会うこともままならず、ジャッキーのつまらないプライドで恋愛関係が壊れてしまいました。

テレサは最後までジャッキーに想いを残していたようで、死の数日前にアメリカから彼に長距離電話をしています。結局連絡がつかず、話せないまま彼女は逝ってしまいました。

悲しんだジャッキーは二〇〇二年中国で発売したアルバムに合成でテレサとデュエットした北京語版の「時の流れに身をまかせ」を収録しています。彼は時空を超えて彼女に対し、心からのお詫びの気持ちを伝えるためにこの曲を選んだそうです。

ジャッキーは貧困層出身でいぶん苦労したことから、常に社会の下層にいるものや弱いものに優しく接し、周りのスタッフにも細かく気を配り、潔癖症と言われるほどのきれい好きだそうです。しかし、ひとたび映画を撮り始めると妥協は許さず、徹底した現場主義で納得が行くまで撮り直しをします。それが大ヒットを生む秘密かもしれません。

還暦も過ぎた彼は満身創痍で時折引退も考えるそうですが、「消防士」を主人公とした作品をいつか撮りたいと構想を練っているようです。70歳を過ぎたジャッキーが悪者を蹴散らすシーンを見てみたいなど今から楽しみにしています。

